

レバノン

シリア避難民 支援報告



シードラちゃんはベイルートマラソンにも少し参加予定です

シードラちゃんのその後

前号でご紹介したシードラちゃんは、歩行サポートのための装具を着けて歩くようになりました。毎週2回、当会の支援を受けながらリハビリに通い、9月から国連の小学校にも通っています。幼稚園に通ったことがないので少々不安ですが、学習年齢が遅れてしまうことから小学校に入学したのです。母親が教えたり、現地の「子どもの家」のソーシャルワーカーからアドバイスをもらったりしていて、英語の先生が大好きだそうです。

そんなシードラちゃんが、シリアから来た子どもたちのための心理サポートクラスに参加しました。彼女の参加したグループ（6～8歳）は、自然な表現をテーマにしていました。ここでは、絵を描くことや歌うことを強制されたり、先生からすごい、すごいなどと過剰に褒められたり、他の子との差異を強調されることもありません。まず絵の具を手のひらにつけて、大きな白い画用紙の上に手形を付けることから始まりました。これまで見てきた経験では、元気な子は弾むようなはっきりとした手形で、心に不安を抱えている子は消え入るような手形にな

る場合が多いのですが、シードラちゃんは水色の絵の具を選び、しっかりした手形を付けることができました。さらに、手形の回りに皆で線を描き、夢中になって色を塗っていきます。

手術跡の残る手を他の子に見られることや、うまく絵筆を持っていないのではないかと心配していたのですが、他の子が協力しあっているのを見て少しずつ安心し、一生懸命色塗りを続けました。絵が完成して先生から感想を聞かれると「きれいな絵が描けた」とうれしそうに答え、迎えにきたおばあさんと一緒に元気に帰って帰りました。

越冬支援

レバノンでは9月に入ってから雨が降ったり、肌寒い日が続いて、冬場は多くの避難民が暖房器具等を必要とすることから、越冬支援のための物資配布を早々と計画しました。11月に入ると倍以上の値段になるそうですが、まだ夏の終わりだったので暖房器具を安く購入することもできました。配布物資に関しては、現地スタッフと話し合いを重ね、ストーブと毛布、食糧セットを購入することにしました。10月中にブルジシェマリ、ラ

シャディエ、ブルジバラジネ、バダウイで計660世帯への配布が終わったところでは、配布時には、ソーシャルワーカーが作った生活に便利な情報を載せた冊子も配っていて、お母さんや子どもが幼稚園や学校、医療機関などにアクセスできるようにしています。

新学期

シリアから来た子どもたちも、地元の子と同じように国連の学校に登録し9月から通うようになりました。シリアから避難して以来、中途から入学できず、長い間待った末の入学です。当会では「シリアクラス」を開いて、特にシリアとは進度が違う英語の授業について行けるように支援をしています。一方でシリア人の子どもたちは公立学校に通うことになりましたが、近くなかったりしてちゃんと通えていない子もたくさんいます。「シリアクラス」はこうした子どもたちにとっては学校の代わりになっています。

幼稚園は治安状況のために10月1日に始まりました。シリアから来た子どもたちがたくさん登録に来たため、いくつかのキャンプではシリアクラ



[左]ヤシーンさん(右)と親族たち
[下]配布物資をもらいにきた母子



スが新しく開講されました。また、通常のクラスに多くのシリアから来た子どもたちが参加しているところもあり、共に引き続き支援しています。

再度難民となって

パレスチナを追われ、今回シリアを追われ、二度の避難を経て最近レバノンのキャンプに住むことになったお爺さんと会いました。ヤシーンさん。1916年生まれで現在98歳。ずっとアラビア語とコーランの先生をしてきましたが、今は盲目になり、病と高齢

のため歩くことはできません。

ヤシーンさんは5家族と一緒に、打ちっぱなしのコンクリートの家に住んでいます。まだ10月の昼間だというのに、床から寒さがしんと伝わってきます。窓が小さく、太陽の光がほとんど入ってきません。絨毯のない床で、厚さ5センチほどのマットに一枚きりの毛布をかぶっていました。当会で先日、物資配布をしたため、ストーブと毛布2枚、食糧等はもらったの

ですが、高齢のためでしょうか、しきりと寒いと言っていました。ソーシャルワーカーと相談し、毛布の追加提供を考えています。

最近、シリアから来たパレスチナ人とレバノン育ちのパレスチナ人、などと分けして支援の量が違うとか色々議論があります。しかしヤシーンお爺さんは言います。

「シリアから来たとか、レバノンで育ったとか、そんな風に区別するのは嫌いじゃ。わしらは、みんなパレスチナから来たパレスチナ人なんだ。何の区別もない。ただただパレスチナ人なんだ。わしの国は、たとえ今帰れなくても、いつもわしの心の中に存在している。たとえ、100年経っても、200年経っても、わしらの孫やひ孫がいつの日か、パレスチナの地に帰ることを願っておるんだ」

W君のこと

レバノンの5か所に「子どもの家」のイニシアティブで作られた「ファミリーガイダンスセンター」という精神科医や臨床心理士などが子どもの診療をしている施設があります。当会では、サイダとエルバスキャンプの診療所を支援していますが、そこには非常に深刻なケースの子どもたちが見られます。

8歳のW君は、2か月前に母親の薬を大量に飲んで自殺を図り、今回再び薬を飲んで自殺を図ろうとしました。薬が空になっているのを母親が発見したそうです。私が会った時には、お姉さんとボードゲームで遊んでいましたが、互いにほとんど笑顔がなく、周囲の子どものことは全く無視している感じでした。姉も非常に顔色が悪くまで生きていることに引け目を感じているような雰囲気です。

父親はアルコール中毒、母もうつ症で、W君は両親から殴られているとソーシャルワーカーは見えています。母親は夫からの暴力を否定しましたが、夫に対する恐怖のためではないかと思われました。17歳になる兄も学校に通うのをやめてしまい、ナイフで20か所も自分を傷つけ、W君に

も暴力を振っているようです。姉もうつ症を抱えて不登校になっています。

こうした家族環境に置いておくとW君が危険だと精神科医が判断し、緊急入院をとということになったのですが、レバノンには日本のような児童相談所はなく、公的にこうした子どもを保護するシステムはパレスチナ難民にはありません。また健康保険もないため専門の児童精神科医がいる病院への入院には高額な費用がかかります。パレスチナ人が働きかけても国連は動いてくれないので、外国人である私たちが諸方面に働きかけて、児童虐待に関する特別な資金を一部提供してもらい、地元の慈善団体にも協力を頼み、もちろん当会も分担して、とまかく7日間Wくんを入院させました。その結果、状況が大幅に改善されました。

W君を担当している臨床心理士モハンマドさんに聞きました。

「初めてきたときはアイコンタクトを避け、「ここにきて誰も助けてくれない」と非常にストレスを感じていましたが、私が「何でも思ったことを話していいよ。したくないことは何もしなくてもいいし、何もしたくない時は、リラックスして静かにしていたらよい。嫌だったら他の子どもを診察

するので、家に帰ってもいい」と話したところ、「じゃあ一緒にいる」と答えました。最初に、きれいなことがいっぱいあると聞いて、学校の先生が殴ること、他にも色々嫌いなことを教えてくれました。その後、いろんな楽器があるので、ハーモニカ、ドラム、ギターと順に選び、静かに時に激しく音を鳴らし、非常に楽しみ、最後には「また来ていいか」と聞いてきました。

入院後は明らかにストレスが軽減されたことがわかります。学校で体罰を与え続けていた教師も解雇されることになり、そのストレスも減りました。もう少しよくなれば、父親にも一度来てもらい父子関係を再構築したいと思います。もちろん簡単ではないです。今後、火曜日に別の臨床心理士、水曜日に私がカウンセリングを行い、またソーシャルワーカーが家庭訪問したり、他の子と一緒に遊ぶ機会を作って見守っていきたいと思います。CCPのおかげでW君を入院させることができ本当に良かったです。」

シリアから来た子ども、元々レバノンに住んでいる子ども、共にひどいストレスや家族問題を抱えています。こうした医療支援にも、皆さまの継続したサポートをお願いいたします。